

## 建築史家・山本学治の思想とその現在の意義

### The study on the architectural thought of architectural historian Gakuji Yamamoto and its meaning in the contemporary period

建築デザイン分野 井口 翔午

山本学治(1923～1977)は戦後日本建築界において活躍した建築史家であるが、これまでにその思想は明らかにされていない。そこで本研究では山本の論考を読解することで、戦後日本建築史のひとつの側面としての山本の思想と、そこに内在する現在の意義を明らかにする。山本の思想は一般化された方法論「現実化」に一貫して基づくものであり、時間を含んだ建設のプロセスと、地方性を反映する「つくり手」、「総合」という建築家像、という点で現在の意義を持ちうるものである。

Gakuji Yamamoto (1923-1977) is an architectural historian who acted vigorously in architectural field in Japan after World War II, however, up till now architectural thought of Yamamoto is never clarified. This study shows architectural thought of Yamamoto as an aspect of Japanese architectural history after World War II and its meaning in the contemporary period, by reading theories written by Yamamoto. As a result, the thought of Yamamoto is consistently based on the universal method “Realization”, and have contemporary value of process including time of construction, “builders” to reflect locality and “integrator” as idea of architects.

#### 1. はじめに

山本学治(1923～1977)は戦後日本建築界において活躍した建築史家である。山本が研究を行った生産技術を含めた建築史は様式史や思想史とは異なる、当時先駆的なものであった。その他にも、東京美術学校で教鞭を執りながら、雑誌〈国際建築〉の編集委員を務め、その他の雑誌上でも批評活動などを積極的に行った。

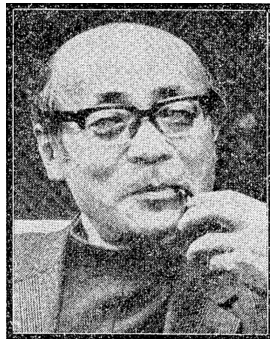


図1 山本学治

しかし、戦後におけるこうした山本の先駆的な思想と広範な活動にも関わらず、現状では山本を対象とした研究はわずかしか存在しない。既往研究のなかでは陶器浩一<sup>1</sup>、宮内嘉久<sup>2</sup>、若山滋<sup>3</sup>によるものが代表的なものと言えるが、これらも山本の思想を部分的に扱ったものにすぎず、思想の特質や全体像は明らかにされていない。これら以外の論考については、単なる追悼文<sup>4</sup>や別の対象を扱った研究<sup>5</sup>において部分的に山本が取り上げられる程度であり、これらは既往研究というよりは研究資料と捉えることができる。以上のように、戦後日本建築界における活躍にも関わらず、わずかに存在する山本を対象とした研究も山本の思想全体を扱っておらず、思想その

もの特質を捉え、そこに歴史的な視座を見出そうとしているとはいえない。

こうした現状において、本研究ではまず、山本の思想そのもの特質と全体像を明らかにすることを目的とする。そして同時に、山本の思想を解明することは戦後の日本建築史のひとつの側面を明らかにすることにつながるはずである。

このような目的に対して本研究では、対象を山本が発表した論考とし、まずは他の対象から山本の思想を説明するのではなく、山本の論考そのものを読解し、思想自体の特質を明らかにした。その上で、山本の思想を正確に理解し、現在の位置づけを行うための補助線として、他の建築家や建築史家の思想と論理的に比較を行う、という方法をとっている。

加えて、本研究では山本の思想を通して設計と、構法やつくり手、建設のプロセスの関係を問いなおすことを目指している。これまで近代建築は手の跡などの建設のプロセスを消去した抽象的な建築を目指してきた。これに対して、近年では構法と空間の検討を並行して進めることや、建設に建築家やクライアントが積極的に参画しようとするセルフビルドなどが一般的に普及してきている。このような現状において、本研究が設計と建設のプロセスの関係に関する展開の可能性を考察するための一助となれば幸いである。

## 2. 歴史研究

本章では、山本の建築史研究の分析を通して、既往研究で宮内が指摘する<sup>6</sup>ような、思想の原型となるものが何であったかを明らかにする。

### 2-1. 大学院時代

山本は1945年から1947年まで小野薫・坪井善勝研究室で構造の研究を行った後、1949年まで特別研究生として関野克研究室で建築史の研究を行ったが、ここではそれぞれにおける山本の活動を分析する。

構造研究室在籍時の活動としては制振装置の実験報告を行った小野との連名で発表された論考<sup>7</sup>のみが確認できた。また山本の元で学んだ茂木計一郎によると、戦時中、山本は徴兵を免れるために理系である構造研究室に在籍していた<sup>8</sup>といい、山本は進んで構造の研究を行っていたわけではないようである。

建築史研究室在籍中、山本は関野と浜口隆一共催のゼミに参加し<sup>9</sup>、ゼミでは関野が必要性を指摘していた<sup>10</sup>建築技術史が主なテーマであった、という。

以上より、以降で扱う山本の技術的側面と機能的側面とを共存させた思想の形成には構造研究室での経験よりも建築史研究室での議論が影響していると推測することができる。

### 2-2. 博士論文「近代化の過程としての

#### 近代建築の史的構成に関する研究」

本節では山本の建築史研究がまとまったものとして、山本の博士論文<sup>11</sup>の整理、分析を行う。

#### (1) 概要

博士論文は全4章の本論からなり、1958年に出版された『建築学大系 6 近代建築史』<sup>12</sup>に掲載されたものに加筆し、内容を整理したものである。内容としては、第1章で論文全体に共通の方法論として「現実化」とその条件としての「テーマ」と「方法」を定義し、第2章でそれを用いて18世紀末からの西洋建築史を分析する。その後、第3章で特に1920年代を抽象的な「現実化」の時期とし、その乗り越えとして山本は具体的な「現実化」を主張する。

以下で論文の中心である「現実化」と、抽象的な「現実化」と具体的な「現実化」の内容を整理する。

#### (2) 「現実化」 - 「テーマ」と「方法」 -

山本は共通の方法論として「現実化」を、ある時代に存在していた建築のあり方とその時代の条件との間にズレが生じ、そのズレを修正することで建築が変化し、その時代の建築特性をつくりあげる一連の過程(図2)と定義し、この繰り返しで近代以降も含め建築史全体の「基本的な骨格」が理解できると

いう。さらに「その時代の条件」として「建物に対する特定の要求をもった人間の生活様式と生活意識」という「テーマ」<sup>13</sup>と、「建物を生産するための特定の生産方法と生産組織」という「方法」を定義している。

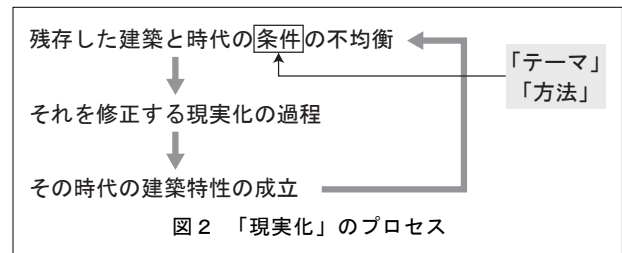


図2 「現実化」のプロセス

#### (3) 抽象的な「現実化」と具体的な「現実化」

山本は1920年代を抽象的な「現実化」の時期であるという。「テーマ」と「方法」の顕著な変化が原因であったとして、当時における必要性と必然性を認めつつも、現代に当時の原理や形式を適用することは批判しているのである。そして、この抽象的な「現実化」の乗り越えとして、山本は自身の主張としての具体的な「現実化」の必要性を訴え、その方向性として「工業化」、「地方性」、「公共性」の3つを指摘する。「工業性」について「近代社会の生活環境を著しく改善し、また工業生産につながる新しい造形表現の道を拓いた」点で評価しつつ、「人間の生活感情を、いかにこの機械文明のなかに調和させるか、に成功していない」点を指摘している。また「地方性」については北欧建築を参照しつつ、「手工業の位置づけや伝統的生活意識を近代建築の中に生かした点」を評価するが、「過度の雰囲気的な地方的特性の尊重」には注意が必要であるという。そして「公共性」を、建築を「社会全体の生産条件と大衆の生活に結びつけて追求」すべきである、とまとめている。

### 2-3. 博士論文の意義

本節では、山本と同時代に活躍した建築史家である村松貞次郎の技術に対する思想との比較を通して、山本の博士論文の意義を明確にする。

村松の歴史は、技術を追い求めた日本近代の特質を解明することを目的とし、建築史の独立した一部として近代史を反映するものとしての技術史であった<sup>14</sup>。これに対して山本の歴史は「現代の建築の方向付け」を行うことを目的とし、技術的側面を含んではいるが、建築史であり、技術的側面を機能的側面とを併置することで一般化された建築史全体に適応可能な方法論に基づくものである。この点が山本による建築史の特質であると言える。

そして、この一般化された方法論「現実化」に基づく建築史観が山本の思想の一貫した原型と呼べるものであったのではないだろうか。

## 2-4. まとめ

本章ではまず、山本の大学院時代の活動の概観を通して、山本の技術を含んだ思想の形成への影響が構造研究よりも建築史研究にみる事ができた。

そして、その建築史研究のひとつのまとめりとしての博士論文の整理、分析を通して、建築史全体に適用可能な一般化された方法論としての「現実化」とその条件としての「テーマ」と「方法」が定義されたこと、そして1920年代を抽象的な「現実化」の時期とし、山本がその乗り越えとしての具体的な「現実化」を主張したこと、を明らかにした。その上で、村松の技術思想との比較を通して博士論文をみると、山本の歴史は、あくまで建築史であって技術史ではなく、技術的側面と機能的側面を併置して一般化された方法論「現実化」に基づいたものであり、これは「現代建築の方向付け」を目的として書かれたものであったのである。

そしてこの一般化された建築史の方法論である「現実化」が山本の思想に一貫性を感じさせるものとしているのではないか。

## 3. 「方法」という思想

本章では、山本が建築史研究から導き出した、建築のあり方を左右する「テーマ」と「方法」という条件のうち、山本が「建物を生産するための特定の生産方法と生産組織」とする「方法」の構造を整理した上で意味を明らかにし、現在の意味を考察する。

### 3-1. 「方法」の構造

本節では「方法」の変遷を追いながら、「方法」の持つ構造を整理する。

山本の論考のなかで最も早いものは1947年に執筆されている<sup>15</sup>が、ここで「方法」という語を用いているわけではないものの、すでに「方法」と呼べるものについて言及している。ここで山本は建築に不可欠な要素として、「テーマ」に対応する「機能的合理性」とともに、「方法」の定義と対応する「製作会社の利益を生むための構法や生産方法の合理性」という「構造的合理性」を定義しているのである。

そして、1969年の論考<sup>16</sup>で「方法」を、いかに上手く生産するかを研究し計画し生産を指導するさまざまな「技術」と、機械と道具を操作してそれを製造する労働者としての「つくり手」と定義している。これ以降ではこの定義を用いて分析を進める。

さらに晩年の論考<sup>17</sup>では「技術は常にその社会のもっている特定の生産関係を通じてのみ作動する」とし、「方法」を、「つくり手」の存在を通して「技術」が具現化する、という2段構造として捉えてい

たことを読み取ることができる。

### 3-2. 「技術」

#### (1) 「技術」の意味

山本は「現代のデザインと構造について」<sup>18</sup>でデザインに不可欠な要素としての「技術」を主張した。山本はこの論考で歴史的視座に基づいて、建築家が「構築方法の発展」という問題を失い「意匠家としての建築家」が成立したのは、近代以降の特殊性であるとして批判し、デザインとはそもそも構造技術を含んだものである、というのである。

一方で前川國男の「テクニカル・アプローチ」や丹下健三と坪井善勝の協働にみられるように技術を含めてデザインを行う、という考えは同時代の建築家たちも共有していたものでもある。

#### (2) 「技術」の特質

では、山本の「技術」の特質とは何であったかという、それはデザインにおける建設のプロセスとしての構法を重要視した、という点である。

1969年に発表した一連の論考<sup>19</sup>で山本は、本来「形の創造性は有用性と造り方の追求における創造性」であるべきである、という。ここで、有用性は「テーマ」と同義で、造り方は「建築で言えば施工技術的な」ものとしていることから、山本は建設のプロセスを「技術」の一部として、デザインに不可欠な要素と位置づけていたことがわかる。

ここで、ケネス・フランプトンとの比較を通して山本の「技術」の特質をより明確にする。フランプトンは構法を「構造の象徴的表現」と「その下に横たわっている構造」<sup>20</sup>からなり、最終的に「現前」<sup>21</sup>するものとして評価している。フランプトンは完成された建築物の不変な部分を構法と呼んでいるのである。対して山本の言う構法は、造り方という時間を含んだ建設のプロセスであると言える。

さらに、建設のプロセスを踏まえないものを「技術」がイメージを実現するために利用されたものとして、構造表現主義的な建築を批判している。

#### (3) 「技術」の限界と現在の意味

しかし、こうした山本の「技術」が当時は限界があったことも事実である。当時は「技術」的要素を取り入れてデザインを行う環境が整っていなかったのである。しかし、構造家・金箱温春によれば1990年代以降、コンピュータの発達により建築家と構造家が互いにフィードバックし、デザインを進めることが一般化してきた、<sup>22</sup>という。つまり山本の「技術」は、当時としては限界があったが、「技術」とデザインのあり方に歴史的な位置づけを与え、また建設のプロセスを含めた評価は構造デザインへの評価軸

のひとつを示す、現在の価値を持つと言える。

一方で、セルフビルドとの関連からも、山本の「技術」の現在の意味を指摘することができる。建築家・塚本由晴は「建築が過度に産業化、専門化し、人々からはなれていること」に対抗する手段として、セルフビルドの可能性を指摘している<sup>23</sup>。目的において山本の「技術」とは異なるが、建設のプロセスを再考するという共通点を通して、建設のプロセスとデザインの乖離が近代の特殊性である、という指摘など、山本の「技術」がセルフビルドに歴史的位置づけを与える可能性を持っているのではないか。

### 3-3. 「つくり手」

#### (1) 「つくり手」の先駆性

第1章でみたように山本は1947年の論考<sup>24</sup>で、すでに「つくり手」の存在に言及している。「つくり手」をテーマとして取り上げた代表的な論考といえる建築史家・渡辺保忠の博士論文<sup>25</sup>が1959年であることと比較しても山本の指摘の先駆性が伺える。

#### (2) 「つくり手」の特質

続いて、山本の「つくり手」の特質を解明する。

まず、山本が具体的な「現実化」として評価する「地方性」を反映させるものとして「つくり手」を捉えている点で独自である。「一定の歴史的・自然的条件をもった地方における近代という社会全体の現実の発展」のために地方的生産基盤や手工業を用いることを評価しているのである。こうした思想はバーナード・ルドフスキーの「ヴァナキュラー」<sup>26</sup>と類似しているように思える。しかし、ルドフスキーは風土的な建築は「完全に目的にかなっているのほとんど不変であり、全く改善の余地がない」と、風土的な建築を完成された形式として捉え、「土着的建築物の形式と建設方法の起源は遠い昔に失われている」と言って、結果としてある土着的な建築物の形態を生かそうとした。これと比較すると、山本の「つくり手」はその時期に「現実存在する」、その土地の「つくり手」の技術を近代建築に生かそうとしており、むしろ「過去の建築形式の単なる模倣や概念的な応用」<sup>27</sup>を批判していることから、「ヴァナキュラー」とは異なるものであったといえる。一方で、建築家・吉田五十八の思想との類似をみることができる。吉田は日本の職人技術を通して、「日本人でなければできない」近代建築をつくらうとした<sup>28</sup>のである。

#### (3) 「つくり手」を扱う現在の意味

こうした山本の「つくり手」はまず近代建築における地方性を言説化する新たな視点を示すことができる可能性がある。それは、単にスタイルとして近

代建築と「地方性」をまとめたものとしてではなく、抽象的な近代建築を実現するときに「地方性」を持った「つくり手」が介在せざるを得ない状況で、ものづくりのレベルの「地方性」がいかに位置づけられているか、という視点である。

ここで建築家・隈研吾の思想をみると、隈はその土地の生活や生産基盤を無視した建築のあり方を批判した上で、建築を「場所から何かを生産する行為」とし、「場所に住み、暮らす人たちによる生産」を評価しようとする。山本の「つくり手」はこうした現在の建築家の活動に歴史的な位置づけを与える可能性を持つと言えるだろう。また、隈と山本の思想の類似性から吉田五十八の活動の現在の価値を見直すことにもつながるのではないだろうか。

### 3-4. まとめ

まず、本章での分析の前提として「方法」を「技術」と「つくり手」に分類した。

山本は「技術」を歴史的視座に基づいてデザインの不可欠な要素としたが一方で、そうした姿勢は同時代の建築家に共有されていた。その上で、山本の「技術」は時間を含んだ建設のプロセスを持つことが特質であり、それは構造デザインやセルフビルドなどの活動に歴史的な位置づけを与える可能性を持つ。

また「つくり手」についてはその先駆性が伺えるが、山本は「つくり手」を介して「地方性」が建築に表れることを評価した。こうした視点は地方的建築をみる新たな視点を与え、建築家の活動に歴史的な位置づけを与える可能性があるのではないだろうか。

## 4. 「現実化」の展開

### 4-1. 言説と批評における展開

本章では、「現実化」という思想の展開を分析し、現在における意義を考察する。

#### (1) 言説における展開 1 -総合する建築家-

まず山本は「現実化」の実現に向けて、「総合」<sup>29</sup>という建築家の役割を主張する。「建築がどんなものであるべきかを決定する要素とは」、「テーマ」と「方法」であり、これを「総合」することこそ建築家の仕事である<sup>30</sup>、というのである。そしてそのために「建築設計の仕事がある一人の人間の総合能力から逸脱し、各専門分野に分割され」<sup>31</sup>た現状では「出発点から対等に考えられる」、技術者を含めた「新しい設計組織」が必要であるとし、ここで山本は構造家との協働を指摘している。

ここに山本の建築家像をみることができる。こうした設計組織の必要性を主張するが、建築家・林昌

二が「一面では非作家性を盛り立てていきたい。要するに、個人がしゃしゃり出てくるのはおもしろくない」<sup>32</sup>というような、無名的で、非作家的な組織の一部としての建築家のあり方を主張したわけではない。山本は「秀れた建築的総合能力が必要である。しかもこの総合的構成能力こそ、建築家をそれ以外の人間から区別し、さらに平凡な建築家と秀れた建築家とを区別するモメントである」<sup>33</sup>とし、建築家に「総合」する者としての個性を求めているのである。つまり山本が持っていた建築家像とは「総合」することにおいて無名的ではなく個性的でありつつ、造形行為に対しては非作家的で条件をまとめるなから形をつくる、というものであった。

## (2) 言説における展開 2 -伝統論争-

山本は伝統論争の論客とされる<sup>34</sup>こともあるが、本節では山本の伝統論争に関わる論考<sup>35</sup>を元に実際の関係性を整理する。

山本は伝統の回復とはある建築像を「成立させた条件が消え失せ」と、「ふたつの条件 -テーマと方法-」の不均衡な状態が生まれ、その状態が「必然的に、その時代の現実に適合すべく、修正されようとする」ことであるという。ここで「現実化」と「伝統の回復」の対応関係をみると、山本が伝統について論じているというより、伝統論を通して「現実化」を語っていることは明らかである。

## (3) 批評における展開

ここでは代表的な批評をまとめた批評集<sup>36</sup>の分析から、批評に対する「現実化」の影響を考察する。

### ■ 東京都児童会館(1964)／大谷幸夫

東京都児童会館を、「全体機能の曖昧さ」を「諸空間の立体的積み重ね」によって解決し、それを「規則的なラーメン」という「構造計画」で実現した点で評価している。ここでは「全体機能の曖昧さ」という「テーマ」と、「規則的なラーメン」という「方法」について批評している。

### ■ 国立総合室内競技場(1964)／丹下健三

国立総合室内競技場は「三日月形をずらせた全体のプラン」と「ケーブルを吊る支柱と基礎の配置」などの組み合わせが高く評価されている。ここでも「全体のプラン」という「テーマ」と、「支柱や基礎の配置」という「方法」という視点から評価している。

### ■ ポーラ五反田ビル(1971)／林昌二(日建設計)

ポーラ五反田ビルは「高層ビルの新しい効用性」としての「柱のない大空間」を「ダブルコア」という「構造形式」で実現したことが評価されている。ここでも「高層ビルの新しい効用性」としての「柱のない大空間」という「テーマ」と、「ダブルコア」という「方法」について批評を展開している。

以上3つの批評より、山本は一貫して、建築史全体に一般化された「現実化」という方法論に基づいて、個々の建築物を「テーマ」と「方法」という視点から批評し続けていたことがわかる。

## 4-2. 「普遍的創造」への展開

### (1) 素材

ここでは「普遍的創造」の前提として、山本が1966年に著書<sup>37</sup>にまとめた「素材」について分析する。

山本は「素材」論を「単なる素材の特性の形象化ではなく、特定の有用性(機能)によって開発された素材の特性の形象化」である、とまとめる。ここで山本は「素材」を質感や雰囲気ではなく構造的特性として語っており、つまり「素材」論は機能による素材の構造的特性の形象化と整理することができる。

### (2) 「普遍的創造」

まず山本は「普遍的創造」を発表した一連の論考<sup>38</sup>で「その社会に内在する必要とその素材に内在する可能性」という「かくされた必然性」を物化することであり、その「成果はそれに続く多くの人びとによって模倣され吸収され修正されて発展する」もの、と定義している。「素材に内在する可能性」は前にみたように素材の構造的特性を指していることからこれは「現実化」と対応していることがわかる。ただ、「現実化」との相違点として「現実化」が個々の建築物についてのみ扱ったのに対し、「普遍的創造」では「新しい環境像の形成に重要な意義」を持つとし、「新しい風景」の形成に言及する点が挙げられる。

### (3) 「普遍的創造」の問題意識

この相違点に「普遍的創造」への展開の問題意識がみてとれる。山本は後の論考<sup>39</sup>において、最新の「技術」の進歩がその利点を社会の底辺に普及させるはずの「小さな技術」に十分に浸透していないことが「環境の破壊」の原因のひとつであるという。この対抗策として「新しい環境像の形成に重要な意義を持つ」「普遍的創造」を定義したと考えられる。

またここから山本の思想が継承されなかった理由を推測できる。ここで山本は「環境の破壊」の原因を「技術」であるとするが、一方でそれを解決するのをもた「技術」であるとする。つまりその後の「技術」から離れ、ポスト・モダンへと向かう建築思潮の中で山本の思想は継承されなかったのではないか。

## 4-3. 現在における展開

本章で山本の思想の可能性として、山本の研究室に在籍した<sup>40</sup>建築家・山本理頭を取り上げる。

埼玉県立大学のデザイン<sup>41</sup>過程を山本理頭は、まずは「ひとつのネットワークを形成できるような配置」という目標があったと言うが、最終的にPC構法の

採用が決まって「決定の手だてがなくて保留状態になっていたさまざまな部分」がまとまったという。山本理顕本人はこうしたプロセスを「設計の場面は、そのあた。(構造と使い方の検討)を行ったり来たりする。どっちな片方の一方通行ではない」(括弧内筆者)と語っている。ここに山本理顕のデザインのあり方と「総合」との共通性を見出すことができる。

#### 4.4. まとめ

山本の言説において、まず山本は「総合」することに関して個性的であり、意匠家ではなく非作家的であるべきとする独自の建築家像を持ち、構造家との協働の可能性に言及していた。次に伝統論との関係については、あくまで伝統論について語ることで「現実化」を表明するという態度であって、山本は伝統について論じようとしたわけではなかった。また批評活動において、山本は「現実化」に基づく一貫した批評を行っていたと言える。

「普遍的創造」の分析を通してこちらも「現実化」の展開であることがわかった。またここで進歩しすぎた「技術」による「環境の混乱」に対しても「技術」で対抗しようとする山本の姿勢によって、建築思潮のなかで継承されなかったのではないだろうか。

最後に、山本理顕の思想との比較を通して、「総合」との共通性を見出すことができた。

### 5. 結論

本研究ではまず、山本の論考そのものの読み解きから、これまで明らかにされていなかった山本の思想の全体像と特質を明らかにした。

山本の思想は常に、建築史研究から導き出された「テーマ」と「方法」という条件からなる一般化された建築史の方法論としての「現実化」に基づくものであり、つねに歴史的視座を備えた一貫性を持ち続けていた。そして山本の思想の特質とも言える「方法」を「技術」と「つくり手」に分類し分析すると、「技術」については時間を含んだ建設のプロセスを重視している点で、また「つくり手」については「地方性」を反映させる存在として捉え、形態の模倣ではない「地方性」のあり方に言及することができた点で、独自である。そして、山本の「総合」という建築家への要求を通して、山本独自の個性的でありつつ非作家的という建築家像をみることができた。

次に本研究で示した現在の意義を以下にまとめる。

・時間を含んだ建設のプロセスから、現在の構造デザインやセルフビルドに歴史的な位置づけを行うことで、その展開を考察できる。

・「つくり手」から、建築を考察する新たな評価軸を

見出すことができ、また現在の建築家の活動に歴史的な位置づけを行うことで、その展開を考察できる。

・「総合」を通して現代の建築家のあり方や職能の展開を探ることにつながる。

#### 註

- 1 陶器浩一「風の糸—山本学治の骨太建築論から学ぶこと」<建築雑誌> 2010.02 p18
- 2 宮内嘉久「内面の歌—山本学治における道の方向」『建築・都市論異見』田畑書店 1984 p176-181
- 3 若山滋「構法史家・山本学治先生の死を悼む」<建築雑誌> 1977.09 p56-57
- 4 河合正一「追悼のことば」、奥村昭雄「山本先生と芸大」、村松貞次郎「山本学治さんを悼む」<建築雑誌>1977.09 p55-56 や、村松貞次郎、稲葉武司他「まえがき」「あとがき」山本学治『山本学治建築論集 ①～③』1980
- 5 稲葉武司「いま、なぜミースなのか—新装版の刊行にあたって」『巨匠ミースの遺産』彰国社 2014 p 3-9、豊川斎赫『丹下健三と KENZO TANGE』オーム社 2013.07、藤森照信「伝統論争」『現代建築の軌跡』新建築社、1995 p214-215 などが挙げられる。
- 6 2に同じ
- 7 小野薫、山本学治、高坂清一「構造物の制振法に関する定性的研究(第一報)」<大会学術講演梗概集 計画系>1947.11 p25
- 8 編集 豊川斎赫「丹下健三と KENZO TANGE」オーム社 2013 p239-240
- 9 村松貞次郎「まえがき」『山本学治建築論集 ①』鹿島出版会 1980
- 10 関野克「登呂遺跡と建築史の反省」<建築雑誌>1947.10 p2-5
- 11 山本学治「近代化の過程としての近代建築の史的構成に関する研究」1961
- 12 山本学治、神代雄一郎他『建築学大系 6 近代建築史』1958
- 13 山本は「近代化の過程としての近代建築の史的構成に関する研究」と『建築学大系 6 近代建築史』では「課題」と「方法」という語を用いているが、「一九世紀初めより一九二〇年代に至る建築の近代化について」(『東京芸術大学紀要』1958)では「テーマ」と「方法」という語を用いている。ここでは、改訂を重ねた結果としての「テーマ」と「方法」という語が最も適切であると判断して、こちらを用いている。
- 14 村松貞次郎『日本近代建築技術史』彰国社 1976
- 15 山本学治「商業主義と建築家の倫理」(1947)『現代建築論』井上書院 1968 大学院で山本と同じゼミに参加していた学生数名と企画していた雑誌<Vivante>に掲載する予定で 1947 年に執筆されたが、この雑誌は出版されなかった。そのため、初出は『現代建築論』の 1968 年となる。
- 16 山本学治「技術開発と技術者の倫理」<建築雑誌>1969.10
- 17 山本学治「戦後の建築技術の変遷」<施工>1975.01
- 18 山本学治「現代のデザインと構造について」<新建築>1954.05・07
- 19 山本学治「個性的創造と普遍的創造」<建築文化>1969.10、「個性的創造と普遍的創造 2 形と技法のかかわり合いについて」<建築文化>1969.12
- 20 ケネス・フランプトン『テクニク・カルチャー 19-20 世紀建築の構法の詩学』TOTO 出版 2002(原著 1995)
- 21 著書では、現前=プレゼンテーションとされている。ケネス・フランプトン「批判的地域主義に向けて」編者ハル・フォスター『反美学 ポストモダン諸相』勁草書房 1987 p40-64
- 22 金箱温春、佐藤淳、大野博史「社会と接続する構造 エンジニアと社会の関係」<新建築>2011.11 p36-43
- 23 塚本由晴「非施設型ネットワーク ふるまいを解放する建築」<新建築>2015.01(オスタング・メインホール(2014)設計アトリエ・ワン)
- 24 16に同じ
- 25 渡辺保忠「日本建築生産組織に関する研究：日本建築史における建築生産史的考察」1959
- 26 パーナード・ルドフスキー『建築家なしの建築』鹿島出版会 1976(原著 1964)
- 27 山本学治「現代建築の発展と伝統の意識」<新建築>1956.07
- 28 伊藤ていじ「解説」『吉田五十八作品集 改訂版』新建築社 1980
- 29 山本は論考によっては「総合」ではなく、同様の意味で「総合」という表記を用いることもあるが、ここではより一般的な「総合」という表記を用いる。
- 30 山本学治「協働設計への道」『現代建築と技術』1963 p9-28
- 31 19に同じ
- 32 林昌二『建築家 林昌二毒本』新建築社 2004
- 33 31に同じ
- 34 藤森照信「伝統論争」『現代建築の軌跡』新建築社 1995 p214-215
- 35 28に同じ
- 36 山本学治『建築批評の眼 現代建築における論理の追求』井上書院 1972
- 37 山本学治『素材と造形の歴史』鹿島出版会 1966
- 38 20に同じ
- 39 山本学治『「大きな技術」と「小さな技術」』<建築雑誌>1969.10
- 40 古谷誠章『十二組十三人の建築家 古谷誠章 対談集』LIXIL 出版 2014
- 41 埼玉県立大学(1999)/設計 山本理顕 山本理顕『建築の可能性、山本理顕的想像力』王国社 2006

#### 図

- 1 「追悼・山本学治君」<建築雑誌>1977.09 p55

## 討議

### 討議 [ 横山教授 ]

文献調査というのはむずかしくて、山本の言説をそのまま自分の意見としてレポートするだけではない。そこで、して再評価して、分析して、新しい知見を見出してくる、というような作業が必要になってくるが、それをどのように進めたのか、というのが1つ。

山本がこういう人だったというのはとても重要だと思うが、当時、どういう影響を与え、何をもたらしたのか。その当時における意義みたいなものはなんなのか。

それと3つめが、違う人たちがでてきたりすることがあるが、それはどういう基準で選ばれた人なのか。どういう脈絡でここにでてきているのか。

### 回答

1つめと3つめが関わっていて、山本の思想を分析するにあたって、ほかの建築史家などをとりあげてそれを補助線にしながらか分析を進めようとしていました。なので、その取り上げ方については似ている、とかいうことだけで取り上げているところがあります。

### 討議 [ 横山教授 ]

比較は最後にされているけれど、その比較までの山本の論考の分析をどのように進めたのか、その途中の過程を教えてください。

### 回答

それは、自分のはじめのモチベーションが関わっていて、スライドの最後に出した結論が自分としては重要なものとしてあって、そこに向かって分析を進めていくようなところがありました。

### 討議 [ 倉方准教授 ]

これは部分的に文章が取り出されているように見えて、井口くんのまとめ、になってしまっている。

### 討議 [ 横山教授 ]

山本が言いたいことがすべて書かれていて、なかなか新しいことが見出しにくいのではないかと思います。

ました。それで、ここでなにを見出したのか、新しい知見はなんだったのか、教えてください。

### 回答

建物がただあるというだけではなく、いろんな人の手が加わりながらできている、そういうことが評価できることであるということ。それとそういうことを評価しようと考えていた人がいた、ということです。

### 討議 [ 横山教授 ]

文献研究はほんとうに難しいと思うんですが、どこでそのあなたのオリジナルな考えや評価がでてくるのか。それで、たくさん資料が書かれているけどその辺がどのように活用されているのかが書かれていない。もっと、分析や研究の方法をしっかりと記述しなければならなかったのではないかと。

### 討議 [ 吉中准教授 ]

山本学治というのは建築史のなかで構造を扱った人、というので読んだことがあります。あなたの思う山本の現在の意味は何だと思えますか。

### 回答

当時山本が考えていたことが、技術が進歩してきて、専門技術がうまくアウトプットできるようになってきたなかでやっと山本が言っていたようなことが現実にできるようになってきているように思います。それだからこそ、ぼくもこの山本という人の論に興味を持てたんだと思います。